

イギリス王立アフリカ会社と大西洋貿易：17世紀後半の航海日誌分析を通じて

高橋，裕悠
九州大学大学院経済学府

<https://doi.org/10.15017/19515>

出版情報：経済論究. 139, pp.37-56, 2011-03-31. 九州大学大学院経済学会
バージョン：
権利関係：

イギリス王立アフリカ会社と大西洋貿易

—17世紀後半の航海日誌分析を通じて—

The Royal African Company of England and transatlantic trade

高 橋 裕 悠[†]
Yuji Takahashi

目次

1. はじめに
2. イギリスとアフリカ貿易
 - 2.1 1660年までの状況
 - 2.2 王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社の発足
 - 2.3 イギリス王立アフリカ会社の設立とその組織
 - 2.4 二つの航海日誌
3. ジェームズ号の活動
 - 3.1 イギリス～アフリカ
 - 3.2 アフリカ～西インド諸島
4. アーサー号の活動
 - 4.1 イギリス～アフリカ
 - 4.2 アフリカ～西インド諸島
5. おわりに —結びにかえて—

1. はじめに

近年、「大西洋世界」については様々な研究成果が著されている。その第一人者と目されているバーナード・ベイリンは奴隷が西半球において「人口，社会，経済が発展する原動力」と形容した上で、「大西洋経済全体の根本をなす，大西洋『システム』の中核であった」と評している¹⁾。一方で，奴隷貿易がアフリカと新大陸に逆の結果をもたらしたことは歴史的にみても明らかである。つまり，アフリカの現状が物語るように，アフリカにもたらされた結果は，新大陸の結果とは正反対のものであった。ネイサン・ナンは，今日のアフリカの経済成長とかつて新大陸に向けて輸出された奴隷の数の間には，負の相関関係があることを明らかとしている²⁾。このように，大西洋に隔てられた新大陸とアフリカ大陸の二つの大陸では，奴隷貿易に代表される貿易活動を通じて，現代にまで続く全く異なる状況が醸成されたのである。

新大陸の一角，英領西インド諸島では甘蔗の到来を受けて砂糖植民地化していったことで，17世紀の半ばより奴隷への需要が拡大していった。ヨーロッパから持ち込んだ織物や銃器等と引き換えられ

[†] 九州大学大学院経済学府博士後期課程

1) ベイリン [2007] 56-57頁。

2) Nunn [2008].

たアフリカの黒人奴隷は、大西洋を越え、新大陸でプランテーションでの労働を強いられた。そして、そこで生産された砂糖・糖蜜やタバコは再び大西洋を渡り、ヨーロッパへともたらされた。1660年代には砂糖を海外から輸入していたイギリスも、17世紀に末に至り英国領からの移入のみとなり、加えてその半分近くを再輸出するまでになった³⁾。このように、ヨーロッパの商品を受け入れるアフリカ貿易が伸展したのみならず、再輸出商品である砂糖をイギリスにもたらす西インドは、重商主義という視点に立てば、まさに理想的な市場であった⁴⁾。

イギリスにおいて奴隷貿易を担った特許会社こそがイギリス王立アフリカ会社 (The Royal African Company of England, 以下RAC) であった。このRACについての研究は20世紀初頭より欧米で本格的に取り組みされてきたが⁵⁾、その先鞭をつけたのはウィリアム・ロバート・スコット (William Robert Scott) である。スコットによって、イギリスのアフリカ探検の先駆けとなったウィリアム・ホーキンス (William Hawkins) に始まり、1588年に設立されたセネガル・アドヴェンチャラーズ (The Senegal Adventurers) から1672年に設立されたRACにいたる組合・会社について考察がなされたのである。とはいうものの、そこでの分析主眼は、アフリカだけでなくロシアや東インド貿易など、対外貿易全般に向けられている。また、現存するRACに関する一次史料も活用されているが、取締役会や株価、配当についての言及が中心となっている。

また、エリザベス・ドナン (Elizabeth Donnan) はアメリカ向けの奴隷貿易に関する一次史料を活字化する中で、ヨーロッパ各国のそれについて概略を著した。そこでは、17世紀中葉から後半にかけてオランダ、フランス、イギリスといった国々がアフリカへ進出していった過程が示されている。RACについても、航海日誌や特許状、書簡や送り状などの史料が数多く収録されているが、スコットやドナンの研究は、数多くの企業に言及する中でRACに目が向けられたものであった。RACの全貌は、1957年にケネス・デーヴィス (Kenneth G. Davies) によって、組織機構や、アフリカ、西インドにおける活動の実態、資金調達などの詳細が研究史上初めて明らかとされた。

RACは1752年に解散したが、デーヴィスは著書の中でRAC破綻の要因として「意思疎通の難しさ」「会計方法の複雑さ」「従業員の意識の低さ」の三つをあげた。しかし、この主因に対して疑義を呈する研究が、1980年代から90年代にかけて現れた。例えば、デイヴィッド・ギャレンソン (David Galenson) は、デーヴィスと同様にRACの内部に破綻の原因を求めつつも、「意思疎通の難しさ」「特許状の課した負担の重さ」「売掛金の焦げ付き」の三つの要因を提示した⁶⁾。一方、アン・カルロス (Ann M. Carlos)、ジェイミー・クルーゼ (Jamie B. Kruse) は両者とは異なり、衰退の主因がRACの外部にあると考えた。それを説明するために彼女らは、RACとその特許状に違反して操業を行う不法業者の二者からなる奴隷市場をモデルとして想定した。そこでは、RACが価格決定者であり、不法業者を市場から駆逐するために奴隷供給価格を引き下げるという戦略をとる。ところが、RACと不法業者では固定費用が異なる。奴隷価格を引き下げたことで、より固定費用の多いRACは自社の利益自体も減少

3) 近藤仁之 [1965] 406頁。

4) 近藤仁之 [1965] 407頁。

5) イギリスのアフリカ貿易に関する先行研究については、高橋裕悠 [2009] に詳しい。

6) Davies [1957].

してしまうことになる。そのため、不法業者が市場からある程度減少した段階で、RACは再び奴隷価格を引き上げるが、それがより経営的に柔軟性をもつ不法業者の再参入、あるいは新規参入を促すこととなってしまふ。結局、RACは十分に利益を確保することが出来ないという市場構造に組み込まれており、市場そのものに問題があったと、カルロスらは指摘するのである。

他方わが国では、RACに関して、1930年代には大塚久雄が、1960年代末から1970年代にかけては池本幸三や山田勝が取り上げてきた⁷⁾。大塚は1660年に出された「破産者に関する布告の条例」に着目する中で、RACの有限責任制の有無について考察を行っているが、スコットやドナンのように、個別の企業分析の対象としてRACを取り上げているものではない。また、池本・山田両論文も、デーヴィスの研究に依拠している部分が多い。これらの研究成果を除けば、殊に1980年代以降、RACの研究は、わが国において等閑に付されている状況にある。

したがって、RACを中心にして奴隷貿易を考察していくことには、二つの意義があると考えられる。第一は特許会社研究の蓄積である。本邦学界は、イギリス東インド会社と比較するとRACに関する研究は等閑に付されてきた。しかし、奴隷貿易が1698年に自由化され、それがイギリスの「重商主義帝国」の形成の契機となったということを考えるならば⁸⁾、池本の言うようにRACが単なる「旧植民地体制の確立のため、道を清める露払いの役割」を果たしたのか、1980年代以降の海外の研究動向を踏まえて、改めて考察する必要がある⁹⁾。

第二に、先に述べたようにわが国の研究においてはRACの一次史料を参照したものは皆無に等しい。また、本邦の研究史をみても貿易の現場実態に関する実証分析はほとんどなされておらず、研究蓄積を補完するという意味においても、やはり同社の研究に取り組むということは十分な妥当性を有していると考えられる。

本稿ではRACの航海日誌を分析することで、同社の活動の再現を試みる。以下、第2節では貿易の主体であるRACの概要について整理を行う。続く第3節、第4節では、わが国の先行研究では用いられていない一次史料である航海日誌を解読する。第5節では先に分析した二つの航海日誌について比較検討を行い当時の貿易の実相を明らかとした上で、今後の課題を別出し結びとしたい。

2. イギリスとアフリカ貿易

2.1 1660年までの状況

イギリスではRACが設立される1672年以前より、すでにいくつかの会社が設立され奴隷貿易を行ってきた。その嚆矢は1618年に設立されたギニア・ベナン会社 (The Governor and Company of Adventurers of London Trading to Gynny and Bynney) である。同社が会社形態をとってアフリカ貿易に取り組んだ最初の組織であり¹⁰⁾、ジェームズ1世 (James I) によってアフリカ西岸をその対象

7) 大塚久雄 [1969], 池本幸三 [1968], [1969], 山田勝 [1976a], [1976b]。

8) 熊谷次郎 [2004] 24頁。

9) 池本幸三 [1969] 208頁。

10) Donnan [1965] p. 78.

地域とした特許状が、ロバート・リッチ卿 (Robert Rich) ら30人を超す業者に与えられた。とはいうものの、経営はさほど芳しいものではなく、1621年には資金調達さえ困難な状態となった。また追い打ちをかけるように、英国下院では同社の独占に対して批判が繰り広げられ、その結果、特許状を手にはせずに貿易活動を展開していた不法業者は特許状に規制されることなく、貿易活動を行った。リチャード・ヤング卿 (Richard Young)、ニコラス・クリスプ (Nicholas Crisp) らが不法業者の筆頭であり、彼らは1631年にギニア会社 (The Company of Merchants Trading to Guinea) を設立した。設立の中心人物は、ヤング卿やクリスプ¹¹⁾のようにギニア・ベナン会社に不満を持っている人物、同社の経営から排除された人物が中心であった¹²⁾。この会社に与えられた特許状ではブランコ岬 (Cabo Blanco) から喜望峰にわたる地域での排他的取引が保証されており、彼らは31年にわたってその恩恵に与った¹³⁾。しかし、清教徒革命以後、チャールズ1世が下賜した特許状の正当性に対して疑問が持たれはじめ、によってこの会社の安定した地位も奪われることとなる。1649年には、革命の指導者であるオリバー・クロムウェル (Oliver Cromwell) の下でこの特許状の持つ「独占」に対して批判が行われた。ギニア会社は国民評議会 (Council of State) にて糾弾を受け、1651年にギニア会社に対して新たな特許状がローランド・ウィルソン (Rowland Wilson)、トーマス・ウォルター (Thomas Walter) らに与えられることとなった。

新しく出された特許状に記載された活動範囲は、以前に比べて大きく狭まった。それまでの「ブランコ岬から喜望峰まで」というアフリカ西岸のほとんどを占める区域に認められていた排他的取引が「コーマントインとシェルボロ川 (river Sherboro) ¹⁴⁾を両端とする20リーグ¹⁵⁾」にまで制限されたのである。

同社は特許状によってその影響を行使できる範囲を狭められた後も、災難に見舞われた。即ち、1651年に、スウェーデンによりケープコースト (Cape Coast) を奪われたのである。この際、ギニア会社はスウェーデンによりケープコーストに出張所の建設を認められている¹⁶⁾。しかし、1650年代末になると、ギニア会社には最早アフリカ沿岸の商館を維持する力は残っておらず、これらの商館は東インド会社に譲渡されることとなった¹⁷⁾。

イギリス東インド会社は、共和制期の1657年に特許状を与えられた。この特許状により、ギニア会社が独占権を有するコーマントインやケープコーストにも駐在することが可能となった。東インド会

11) ギニア会社の中心人物は、長い間不法業者として活動していたクリスプであった。彼は1624年に黄金海岸のコーマントイン (Cormantine) に商館を築いており、アフリカ貿易の基盤を築いていた。1644年時点で、ギニア会社の財産の半分近くが彼の所有であったと言われている。しかし、このために彼は議会から「独占者」として訴追を受け、アフリカに有していた土地などの財産を没収された (Donnan [1965] pp. 81-82.)。

12) この時特許状を与えたのはチャールズ1世である。また、特許状の内容はギニア、ベナン、アンゴラでの排他的取引を40年間に渡って認めるものであった (Zook [1919] p. 141.)。

13) 清教徒革命を受けて、1642年にチャールズ1世により同社の特許状が向こう20年間は有効であることが明言されている (Zook [1919] p. 141.)。

14) シェラ・レオネの近くにある。

15) リーグ (league) は距離の単位であり、1リーグ=3マイル=約4.8キロメートルである。

16) この出張所を活用して、コーマントインとの取引が行われた (Zook [1919] pp. 141-142.)。また、1658年にケープコーストの主がスウェーデンからデンマークに変わった際にも、同社がデンマークから立ち退きを要求されることはなかった。

17) 1659年にオランダが商館に放火を行い、イギリス東インド会社が抗議を行っている (Donnan [1965] p. 88.)。

社がアフリカ西岸に拠点を設けた理由は、イギリスとインドにおける中継地点という地理的要因と、アフリカからインドへの金の運搬という経済的動機に基づいたものである¹⁸⁾。とほいうものの、イギリス東インド会社への特許状には「船荷の1割に相当する金額を支払うこと」との規定があった。そのため、同社はアフリカ貿易を完全に手中に収めることは叶わなかった。

2.2 王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社の発足

しかし、1660年の王政復古で状況は一変する。同年にチャールズ2世 (Charles II) が即位し、カンバーランド公ルパート (Rupert, Duke of Cumberland) を中心として王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社 (The Governor and Company of the Royal Adventurers of England Trading into Africa) が設立されたのである¹⁹⁾。これはチャールズ2世がガンビアで金の採掘を計画している一団を知ったことに端を発している。チャールズ2世はこの計画をより強力に進めるべく、1660年12月18日によって特許状が王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社に下賜された。それによって、1000年間にわたり西アフリカのブランコ岬から喜望峰までの地域と近隣の島々での独占的な貿易が同社に対して認められた。

設立の動機は「アフリカ貿易の振興、金鉱の探索、プランテーションの推進」と特許状に記載されており、奴隷貿易についてはこの時点では言及されていない²⁰⁾。加えて金鉱については国王チャールズ2世がその所有権の3分の2を有しており、金鉱から採れる金の3分の2は国王の所有物となった²¹⁾。

また、チャールズ2世は1660年の王政復古後にイギリス東インド会社の重役職を自分の腹心である貴族で固めた²²⁾。そして1662年に「破産者に関する布告の条例」を出したのであるが、同条例の立法理由は注目に値する。そこでは「商業を営むように育てられていない数々の貴族、紳士、貴頭の士がしばしば東インド会社あるいはギニア会社…その他の公の会社に多額の貨幣を投資し、この資本により利潤を受けているが…近來かかる人々は破産法に従わしむべきではないという意見が生じてきた…誰人にも東インド会社、ギニア会社あるいは何らかのjoint-stockにいくらかの額の貨幣を投資または出資し、あるいはするであろう者は…破産法の下にある商人と考えられるべきではなく、またその責任を負わされるべきではない…」と述べられている。これにより、イギリス東インド会社やアフリカ会社を含む「合本会社 (joint-stock-company)」の出資者達が破産法の適用を免れ、会社の負債について無限責任を負担することがなくなったのである。大塚久雄はこの立法理由中の「貴頭の士」がチャールズ2世の腹心であり、この重役団によって「全社員の有限責任制」が要求されたことは明白であると指摘している²³⁾。したがって、次に取り上げるイギリス王立アフリカ貿易アドヴェンチャラーズ会社も、その後設立されるRACも有限責任制を有していたことになる。

18) より穿った見方をすれば、イギリス東インド会社はアフリカという中継地兼供給基地を手に入れることで「イギリス本土に帰属するはずの金を奪っている」という批判をかかわすことにも成功した (Zook [1919] p. 142.)。

19) Zook [1919] p. 142.

20) Zook [1919] pp. 144-145.

21) このような国王に有利な条項は他の特許会社にもみられるものである。

22) 特許状には総裁と理事11人がナイト爵 (knight)、理事1人が「郷士 (esquire)」, 理事11人が「紳士 (gentleman)」, 理事1人が「貴族 (peer)」であると記されていた (大塚久雄 [1969] 505頁.)。

23) 大塚久雄 [1969] 504-505頁。

王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社は1663年10月に、より能率的な運営を行うためにチャールズ 2 世より新たに特許状が下賜された。1660年の特許状と1663年の特許状にはいくつかの違いがある。まず名称がこれまでの「王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社」から「イギリス王立アフリカ貿易アドヴェンチャラーズ会社 (The Company of Royal Adventurers of England Trading into Africa)」に変更された。また、特許状の独占区域についても「ブランコ岬から喜望峰まで」という従来のものから「サリー岬 (the Cape Sallee) ²⁴⁾から喜望峰まで」と北限が上昇した。貿易の目的も、1660年の特許状にみられるアフリカ物産やアフリカ探検に加えて、初めて奴隷について言及がなされた。また、組織機構にも変化があった。従来組織されていた六人委員会から、総裁 (Governor)、副総裁 (Sub-Governor)、総裁代理 (Deputy-Governor) の役職が設けられた36人の理事で構成される理事会に改組されたのである²⁵⁾。

新たな特許状と増資によって、新アドヴェンチャラーズは更なる発展を遂げるかにみえたが、オランダ西インド会社 (Dutch West India Company, 以下WIC) と第二次英蘭戦争が同社の前途に立ちはだかった²⁶⁾。王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社は、WICと長年にわたりギニア海岸でアフリカ貿易のシェアをめぐる激しい競争を重ねていた。しかし、第二次英蘭戦争によって安定してアフリカ貿易を行うことが次第に困難となり、新アドヴェンチャラーズは資金難に陥った²⁷⁾。加えて、不法業者も増加し、経営上の打撃を受けた新アドヴェンチャラーズは1669年には活動を事実上停止することとなる²⁸⁾。

2.3 イギリス王立アフリカ会社の設立とその組織

前会社である王立アフリカアドヴェンチャラーズ会社の経営の行き詰まりを受けて、RACは1671年末に株式の募集を開始し、翌年の1672年にチャールズ 2 世から特許状が下賜された²⁹⁾。特許状はブランコ岬から喜望峰の間で1000年間の独占的な取引を認めるというものであった。

RACの活動の場は、ロンドン、西アフリカ沿岸、西インド諸島の三つに大別できる。

まずロンドンのRAC本社では、理事会 (Court of Assistants)、株主総会 (Court of General) などによって経営の意思決定が行われていた。これら組織のうち、最高の意思決定機関である株主総会では総裁・副総裁・総裁代理が1名ずつ、そして24名の理事 (Assistant) が株主より選出された。しかし、「総裁」とは実質的には名誉職であり、ヨーク公 (Duke of York) が選出されるという形式的なものであった。

理事会は副総裁、総裁代理、理事の計26名によって構成され、原則として週に一度開催された³⁰⁾。ま

24) 現在のモロッコ沿岸にある。

25) Zook [1919] p. 148.

26) 第二次英蘭戦争は1665年から1667年まで続いた。

27) Zook [1919] p. 156.

28) Zook [1919] pp. 157-159.

29) しかし、RACの総裁であるジェームズ 2 世は1688年の名誉革命により王位を追われ、後継のオラニエ公もパトロンの性格が強かった。そのため、1688年以降はRACは王室との結びつきを失ってしまった。

30) 役員に対する報酬は、1700年までは750ポンドを理事会の構成員計26名が会議に参加した回数で分割した額が配分された (Davies [1957] p. 157.)。

た、理事会に付属する形で理事から構成される委員会が設けられた。委員会には通信文書委員会 (Committee of Correspondence), 購入委員会 (Committee of Goods), 船舶・私貿易委員会 (Committee of Shipping), 会計委員会 (Committee of Account) の4つがあった³¹⁾。しかし、1700年以降は1699年に設立された八人委員会の役割が大きくなり、理事会の権限は次第に縮小していった³²⁾。また、理事会・各委員会のほかに実務担当として、財務担当者 (Treasurer), 書記 (Secretary), 経理士 (Accountant), 財産管理人 (Husband), 船舶調査人 (Surveyor of Shipping), 事務所管理人 (Housekeeper) の6名が常勤として雇われた³³⁾。常勤の職員が各委員会に出席し、経営方針の決定と実務の段階を結び付けることで、会社全体の連携を図った。

また、RACのアフリカ沿岸での拠点はケープコーストであった³⁴⁾。ケープコーストには総支配人 (Agent General) が駐在しており、RACのアフリカでの活動を統括していた³⁵⁾。1710年にはケープコーストは「外塁、砲座、堡塁、40フィートの高さの煉瓦でできた壁、74門の大砲、これらに加えて大量の小火器によって防衛を行っている。また代理人、従業員、書記、職人、兵士のための宿舎、2つの巨大な水槽、倉庫、穀倉、ラム酒貯蔵庫、作業場、1000人以上の奴隷が入る収容所、教会がある」と記されており、その規模がうかがえる³⁶⁾。RACは時代によってその構成は異なるが、おおよそ17の居留地を保有しており、それらは城塞 (fort) と商館 (factory) に分けられる³⁷⁾。城に塞は土塁あるいは石塁が築かれ、10人前後の警護兵が警備にあたっていた。一方、商館には3名程度の人員しか配属されていなかったが、中には城塞へと拡張されるものもあった³⁸⁾。

そして、西インド諸島ではRACはバルバドスとジャマイカに2人から3人の代理人を、より小さいネーヴィス (Navies) などには1人から2人の代理人を配属していた³⁹⁾。彼らはアフリカから船が到着すると、航海日誌や帳簿を点検し、奴隷の競りの手配も行っていた⁴⁰⁾。

2.4 二つの航海日誌

続く第3節では1677年12月から翌1678年5月にかけて記されたアーサー号 (The Arthur) の航海日誌を、第4節では1675年3月から1676年6月にかけて記述されたジェームズ号 (The James) の航海日誌を参照する。いずれも英国国立公文書館 (The National Archives, 以下TNA) に所蔵されてい

31) のちに、西アフリカ北部貿易委員会、係争委員会、財政委員会が新たに設立された。また、追加された委員会のうち、財政委員会は1693年にRACの会計系の業務を移管する形で発足した (Davies [1957] p. 158, 164.)。

32) Davies [1957] pp. 158-159.

33) 財務担当者、書記、経理士は年給100ポンド、財産管理人は年給80ポンド、船舶調査人は年給50ポンド、事務所管理人は年給15ポンドであった。また、これ以外にも臨時の人員が必要に応じて雇われた (Davies [1957] p. 163.)。

34) ケープコーストは、オランダが拠点を置いたエルミナに次ぐ規模であった (Davies [1957] p. 240.)。1660年より、ケープコーストを巡ってイギリスとオランダの間で激しい奪い合いが繰り返されたが、1664年以降はイギリスのアフリカにおける本拠地となった (Ward [1948] p. 365.)。

35) アフリカに派遣される職員は、RACの利益に反する行動を防ぐために、同社より保証金が課せられていた。また、総支配人はRACから保証金だけでなく保証人も求められていた。 (Carlos [1994].)

36) Davies [1957] pp. 240-241.

37) 城塞は継続的な活動を行うための拠点であったが、商館は必要な場合の一時的な取引拠点であった。 (Davies [1957] p. 246.)。

38) Davies [1957] pp. 245-247. 例えば、アクラ (Accra) は1679年に城塞に格上げされ、ジェームズ港 (James Fort) という名前を与えられている。同年には、アノマブ (Anomabu) も城塞へと増築されている (Davies [1957] p. 250.)。

39) Davies [1957] p. 295.

40) Davies [1957] p. 296.

るものであり、「T70」と分類されている。頭文字の「T」は「Treasury」の略である。このT分類には大蔵省または大蔵委員会関連の史料がここに収められており、T70は1847年よりTNAへ所蔵されている⁴¹⁾。このT70の中には、さらに1から1691までの下位分類が設けられている。例えばT70/75は前身のロイヤルアドヴェンチャラーズの議事録が、T70/76からT70/99はRACの理事会、T70/100とT70/101は株主総会の議事録である。航海関連の文書はT70/1210からT70/1228にまとめられており、本稿で取り上げるジェームズ号の航海日誌はT70/1211、アーサー号の航海日誌はT70/1213となっている。本稿では、T70/1211についてはドナンの書物に収められている抄録版を⁴²⁾、T70/1213についてはオンラインで公開されているものを参照する⁴³⁾。

以下では、まず記された年代の早いジェームズ号の航海日誌の内容を抽出し、次いでアーサー号の航海日誌を逐次的に再現し、奴隷貿易船の行動を詳細に追う⁴⁴⁾。

3. ジェームズ号の活動

ジェームズ号の航海日誌は、1675年3月27日に、「この黄金海岸行きの航海の日誌は、王立アフリカ会社の所有するジェームズ号の、同社に所属する船長ピーター・ブレイク (Peter Blake) が記録を行う」という書き出しで始まる⁴⁵⁾。4月1日にはブレイクはロンドンの本社に使いを出し、書簡を届けさせている。この時に、アフリカのケープコーストに駐在しているトーマス・メリッシュ (Thomas Mellish) 総支配人宛の小包を受け取っている⁴⁶⁾。また、4月5日の出港日にも本社に手紙を出しており、長い船旅の前に細かい作業や情報の伝達が行われていたことが推察される⁴⁷⁾。

3.1 イギリス～アフリカ

出航後、ジェームズ号は4月30日にはボア・ビスタ島 (Boa Vista) に到達し、翌5月1日にはサンティアゴ島に移動している。このサンティアゴ島にて、ブレイクは現地の首長のもとを訪れ、RACの

41) Jenkinson [1912] p. 197. 大分類のT項目には様々な財務関係の書類が収められている。例えば、T1には大蔵委員会の文書や受け取った書簡が、T4には大蔵委員会から海軍への書簡が収められている。なお、RACに関連する史料の大半はこのTNAに所蔵されている。運び込まれた当時の名称は“Public Record Office”であったが、2003年にTNAへ改組された。

42) 航海日誌ならば当然あるべき風向きや天候に関する言及が一切出てこないのはそのためである。また、ドナンも同様にT70/1213を活字に起こしてはいるが、省略部分が多いため参考にとどめることにする。また、筆者はT70/1211について原史料を入手したが、本稿の脱稿後であり、十分に内容を生かすことができなかった。この点については、今後の課題としたい。

43) T70/1213については、活字に起こされたPDF版がTNAのウェブサイト上で入手可能である。また、原史料とPDFデータの各ページの内訳は一致している。なお、このPDF版はT70/1213の書き手であるジョージ・ヒングストン (George Hingston) の一族を研究しているマイク・ブルーワード氏 (Mike Breward) の手によって、活字化されたものである。

44) 以下、本稿では特記しない限りは、PDFデータのことをT70/1213と表記する。

45) 3月27日にはRAC理事のウィリアム・ロバーツ (William Roberts), 同じく同理事のウィリアム・ステイブンス (William Stevens), そして元RACアフリカ総支配人のエイブラハム・ホールディッチ (Abraham Holditch) の3名が、RACを代表してジェームズ号を訪問している (Donnan [1957a] p. 199.)。また、ホールディッチは1672年から1673年にかけてアフリカの総支配人の地位にあり、メリッシュの前任者に当たる (Porter [1969] p. 204.)。

46) メリッシュは1673年から1676年7月頃までアフリカで支配人を務めていた (Porter [1969] p. 204.)。また、この際に受け取った小包については、これ以後ドナン編集の航海日誌の中では触れられていない。

47) このような事務手続きについての言及は、アーサー号の航海日誌には出てこない。

砦のあるポルチュガル (Portugal)⁴⁸⁾に拠点を置いて活動しているジェオ・パリズ (Geo Parris) の消息を耳にした。ブレイクは、より安全に航海を行うために彼の助力が必要であると考え、パリスのサンティアゴ島への到着を待つことにした⁴⁹⁾。

8月30日には「アッシニ (Assini)⁵⁰⁾が見え」、ここでジェームズ号は金、奴隷をそれぞれ他の積み荷と交換して入手し、9月7日には更に針路を進め、アキム砦 (Axim) にて投錨している⁵¹⁾。そして同12日には「ファウル・エイルモア (Fowle Aylmore) 船長⁵²⁾がメリッシュ総支配人からの命令書を携えてセコンディ (Sekondi) からやって来た」。この時のメリッシュからの命令書の内容は、現住民からの攻撃を受けたのでケープコーストに急行するように要請するものであった⁵³⁾。

翌10月15日にはウィネバ (Winneba) に向かうように命令を受け、同時に密貿易者のハウ船長 (Howe) の捜索も行っている。例えば、ブレイクは10月22日にアクラで投錨した際に、現地部族の長からハウ船長についての情報を聞き出している。11月16日にはウィネバで投錨し、ウィネバの商館の責任者であるアーサー (Arthur) から、ハウ船長の消息について知らせを受けている⁵⁴⁾。また11月23日には、現地部族同士の争いで危険な状況にあるアガ (Agga) の商館長ハーヴェイ (Harvey) から、穀物や奴隷、会社の資金を引き取るよう要請する手紙を受け取った。これに応じて、ジェームズ号は翌24日にはアガ商館から金や奴隷を船に積み込んだ旨が記載されている⁵⁵⁾。

その後、12月8日の日誌にはアノマブにて、エイルモア船長が携えてきたメリッシュの命令書に対して、不満を抱くブレイクの様子が描かれている。その命令書には「私 [ブレイク] の船の全ての奴隷を彼 [エイルモア] の船に運ぶ」ように、記されていた。しかし、ブレイクは「奴隷の状態は良好であり…しかもそれは自分 [ブレイク] の会計で購入したものである…」ということを理由に、メリッシュと直接話し合う決意を固めケープコーストに向けて出発した。翌9日にはケープコーストにてメリッシュと面会し、彼から「[ブレイクはジェームズ号が] アノマブとアガで積んだ16人の奴隷 [のみ] を [ヴァイン号に] 引き渡す」という命令をあらためて受け取った。その日の夜にケープコーストを出発し、10日朝にはアノマブに戻り、ファウル船長にメリッシュから新しく出された命令書を渡ししている。

1676年1月になると、ジェームズ号は長期航海を想定した行動をとるようになる。1月6日には「奴

48) RACは、1678年にポルチュガルに砦を建設している (Davies [1957] p. 216)。

49) ドナン編集の航海日誌では、5月1日に続く記述の日付は8月30日となっている。この間のジェームズ号の行動・行程は不明である。しかし、ドナンは以下のように補足している。「フリゲート艦ホーク号 (Hawk) のブレイク艦長 (Blake) と面会し、書類の審査を受けた。その結果、この海岸一帯 [セネガンビア] での操業を禁じる内容の命令を受けた。その後、[ジェームズ号は] 南下して大半の貿易拠点地に立ち寄り、鉄とシロメをマラグエッタ (香料の一種) と象牙に交換している」 (Donnan [1965] p. 199.)。

50) ドナンによればアッシニは「黄金海岸で最初に到達する交易都市である」とされる (Donnan [1965] p. 193.)。

51) この時、アキムはオランダの拠点地であった。この地で、ブレイクはオランダ人商人の許可を得て木材や水を補給し、穀物を購入している。しかし、エルミナに赴任した新任の総督によって、彼はアキムでのこれ以上の取引を禁じられた (Donnan [1965] p. 200.)。

52) エイルモアはヴァイン号 (Vine) の船長であった。

53) しかし、9月12日以降の航海日誌はドナン版では省略されており、次の日付は9月30日である。そのため、ジェームズ号のこの間の活動内容は不明である。

54) アーサーによる情報は、「ハウ船長は…不法業者のよく通る『ウィンドワードへの水路』には現れていない」というものであった (Donnan [1965] p. 200.)。

55) Donnan [1965] p. 201.

隷たちの換気用に格子と艙口の端縁材、防水縁材を取り付けるために、私 [ブレイク] と大工で上陸し木を伐採ししており、船を補修している様子が記されている。一方で、商館からの奴隷引取も増えていく。1月8日にはメリッシュからの命令を受け、奴隷を引き取るためにウィネバの商館に針路をとっている。翌10日にはウィネバに到着し、責任者のアーサーにメリッシュからの命令書を渡している⁵⁶⁾。ウィネバでは合計167名の奴隷がジェームズ号に積まれたが、ブレイクの言葉を借りれば「奴隷の大部分はやせていた」という有様であった⁵⁷⁾。その後、1月13日にウィネバを出帆し、16日にはアノマブに到着している。しかし「停泊地での停泊許可を受けていなかった」ために「アノマブから少し離れた場所で停泊」している⁵⁸⁾。

ジェームズ号は1月19日にはケープコーストに帰還し、同24日には「火薬とブランデー以外の商品を陸揚げ」し、商品の売上を記した帳簿や奴隷の数を記入した帳簿をメリッシュに提出している。同27日には「ウィリアム・バートレット (William Bartlett) がメリッシュ支配人の命令によりやって来て奴隷の数を数え、彼ら全てに焼き印を押し」た⁵⁹⁾。また、2月7日にはセコンディで投錨し、2月9日には穀物100箱を手に入れている⁶⁰⁾。そして、3月8日にディッキー (Dickey)⁶¹⁾からバルバドスに向けて出発したのである。

しかし、航海日誌に記されているのは、ここまでみてきたRACの業務に関係する内容だけではない。西インドへ向けての出発よりさかのぼること2月1日に、ブレイクとメリッシュの間で非常に興味深い議論がなされているのである。その当時、オランダの拠点地であったエルミナで、オランダがイギリス人の不法業者を匿っていることにブレイクが大いに憤っているのである。ブレイクはエルミナに匿われているアリス号 (Alice) の英国人船長の引き渡しを要請するようメリッシュに求めたが、メリッシュは「オランダ側は引き渡さないだろう」とブレイクに返答している。さらにメリッシュは「[エルミナの] 停泊地に行ったとしても、英国人不法業者に関与することを認めない」とブレイクに念を押している。加えて、ブレイクはこの時ケープコーストに捕らわれていた不法業者の頭目であるグライブル (Gribble) に対して、「現地評議会で命令を出して」罰するように求めている。同じく居合わせた簿記係 (Accountant) の「彼ら [オランダ人] は彼 [アリス号の船長] をオランダ人と勘違いしており、彼は間違っただけだ」という発言にも、「彼 [オランダの総督] は英国国王を侮辱しており、英国臣民を脅かし、平時にもかかわらず彼ら [不法業者] をアキムにて幽閉している。…我が王立アフリカ会社に対しても侮辱を行っているのである」と応じている。議論はメリッシュが「本国の役員が…不法業者を一掃すべく行動するだろう」と言ったことで一応の終結をみせたが、互いの利益が相反する英国人、オランダ人、不法業者の思惑がはっきりと見て取れる⁶²⁾。

56) 同時に船長ブレイクはメリッシュから受け取った命令書をアーサーにみせ、この命令が正当なことであることを示している (Donnan [1965] p. 202.)。

57) 1月19日には、ブレイクが奴隷の大半が瘦せていたということに対して、メリッシュに不平を述べている。メリッシュは「部族の長が借金の返済に払ったものであり断ることができなかった」と釈明している (Donnan [1965] p. 203.)。

58) とはいえ、アノマブへの上陸を禁止されていたということではなく、ブレイクは商館に引き取るような商品があるかどうか確認している。

59) この日以降、奴隷を引き取ったという記述は出てこない。

60) この後にも、ジェームズ号はディスコブで穀物1000箱を購入している (Donnan [1965] p. 204.)。

61) ドナンによるとディスコブには多くの呼び名があった (Donnan [1965] p. 193.)。2月9日以降の航程と合わせて考えると、「ディッキー」もそのうちの一つであると考えられる。

3.2 アフリカ～西インド諸島

さて、3月8日に西インドに向けて出発したジェームズ号は、5月21日にバルバドスのカーライル湾 (Carlisle Bay) に投錨する。この間、3月28日には魚を釣り、その魚を奴隷の食事として与えたという内容が航海日誌には残されている⁶³⁾。バルバドスに到着した後、5月22日にはRACのバルバドスにおける代理人であるエドウィン・スティード (Edwyn Steed) が船を訪れ、翌23日には二日後の25日に奴隷の競りを行うことが決定された⁶⁴⁾。3月24日には「奴隷の髭を剃り、…体を洗い…」翌日の競りに向けて奴隷の身なりが整えられている。競りの初日、25日には163名が、26日には70名が、27日には118名が売却された。また、売却と引取は必ずしも同時ではなかったようで、29日の航海日誌には「[27日] 土曜日に売れた118名のうち80名を引き渡した」と記述されている。翌5月30日には「スティード氏に帳簿を渡した」とあるが、すぐさまジェームズ号は新たな航海の命令を受けることとなる。

6月4日にブレイクは「…レコード (Reckord) 船長の奴隷を引き受け、ネーヴィスまで運ぶよう…」命令を受けた⁶⁵⁾。同6日には「水夫たちはネーヴィス行きを承諾…」し、10日までには「航海に関する書類を受け取り…レコード船長が奴隷を私の船に寄越し…」出発の準備が整えられた⁶⁶⁾。そして、6月14日にはネーヴィス近海に到達し、「…この島[ネーヴィス]の総督であるウィリアム・ステープルトン卿 (William Stapleton) …」の乗船したフリゲート艦フェニックス (Phoenix) に出向いた。艦上でブレイクは、ステープルトン卿から「…何故黄金海岸ではなく「カラバル湾」の奴隷を連れてきたのか」という質問を受けた。これに対して、ブレイクは「[ジェームズ号の船荷ではなく元々は]ジョン・アレクサンダー号の船荷である」とステープルトン卿に説明している⁶⁷⁾。翌15日にネーヴィスに上陸し、奴隷の売却の方針について話し合いが行われた。RACの命令書には「…健康な奴隷は1人当たり19ポンド以下で売却しないこと…」と書かれていた。しかし、フェニックス号の乗員達がジェームズ号の運んできた奴隷が「湾」の奴隷であると吹聴し、19ポンドで売却できる見込みは薄いと、ブレイクは現地代理人から聞かされた。また、命令書では、奴隷が売れ残った場合にはジャマイカに向かうように指示されていた。だが命令に反して、フェニックス号がジャマイカでジェームズ号の積んでいる奴隷が、バルバドスやネーヴィスで売れ残った奴隷であると触れ回っている可能性があること、そしてブレイクが船員に対して7月15日までにイギリスに向けて出帆すると約束していたという2つの理由のために、ジャマイカ行きは実現しなかった⁶⁸⁾。ネーヴィスでの奴隷の競りは6月20日から始まり、その日のうちに「…全体の4分の3が売れ…」⁶⁹⁾、22日には完売した⁷⁰⁾。その後、ジェームズ

62) この部分の詳しい考察は第5節に譲る。

63) この際、釣った魚10匹につき褒美としてブランデー1ポイント (約0.57リットル) が与えられた。また、3月29日、30日、31日にも魚を釣り奴隷に食事として与えている (Donnan [1965] p. 204.)。

64) その際には「…奴隷の競りを行うので準備をしておくように…」と命令が出されている (Donnan [1965] p. 205.)。

65) 船荷の運賃について、RACとレコード船長の間で交渉が決裂したためである。なお、レコード船長はジョン・アレクサンダー号 (John Alexander) で5月30日にオールド・カラバル (Old Calabar) から到着している (Donnan [1965] p. 205.)。

66) 「これまでの船旅にもかかわらず…」という6月4日の航海日誌の書き出しや「船員はこの命令に反対したが…」ということからも、仕事が追加されたことに対する船長と船員の不満がうかがえる (Donnan [1965] p. 205.)。

67) ドナンによると、「湾」(カラバル湾)の奴隷に対する偏見は、18世紀を通じて広くみられるものである (Donnan [1965] p. 205.)。

68) ネーヴィス駐在のRAC代理人カーペンター (Carpenter) は命令を無視したジェームズ号の船員に対して、抗議を行っている (Donnan [1965] p. 206.)。

号は7月8日に英国に向けて出帆し、10月12日にダウンズ (Downs) で投錨し、1年半以上に及ぶ航海を終えた。

4. アーサー号の活動

アーサー号の航海日誌は1677年12月5日より始まっている。冒頭では「ニュー・カラバールへの航海日誌、アーサー号船長はロバート・ドゥーグッド (Robert Doegood) であり、グレーブゼンド (Gravesend) からニュー・カラバール、そしてそこから荷下ろし港のあるバルバドスまでの全ての行動と取引はイギリス王立アフリカ会社の利益のために行われる」と、書き手のジョージ・ヒングストンの署名が付されている。

4.1 イギリス～アフリカ

アーサー号は12月5日にグレーブゼンドを出航した後は、12月18日にイギリス最南端のリザード (Lizard) までは海岸沿いに時計回りに進む。その途中、12月9日にはダウンズで投錨している。出国前の船荷検査を受けるためである。翌10日には税官吏2名が乗船し事前の申告通りの船荷が積まれているかどうか船内は「…くまなく検査…」が行われた。15日にも同様の検査が行われたが「…それ以前 [12月10日] に行った調査以上の結果を得ることは出来…」ず、この結果を受けてヒングストンはドゥーグッド船長から「…この船に会計簿に記された以外のものを積み込むような船員はいないと信じている…」と抗議を受けた。翌16日にはダウンズを出発し⁷¹⁾、18日にリザードに接近した後は、目的地であるカラバール湾を目指して航行することとなる。

以降、アフリカに到着し交易活動を開始するまでは風向きや天候の話が主となるが、書かれている内容はそれだけではない。例えば、12月24日には、他の船と遭遇し挨拶をしたものの悪天候で相手の船まで届かなかったことが話題にあがっている⁷²⁾。翌25日には、前日に遭遇した船と再び出くわし、船の名前は分からなかったもののハイルズ (Hayles) という船長の名前は聞き取れたということが記されている。1678年1月1日には「…観測の結果マデイラ諸島の近くにいることがわかった」、1月10日にはカーボ・ベルデのサンティアゴ島を視認し、1月25日にはリベリア沿岸を、同27日にはリベリア南端のパルマス岬を通過し、31日には「…観測でケープ・スリー・ポイント (Capetreepontus) に到達していることがわかった」と記され、カラバールに近づいていることがわかる。

そして、2月7日には「…午後4時頃に陸地が見えた…我々の目的地だと推測される…浅瀬を見つけた。深さは12ファゾム⁷³⁾だった…5.5ファゾムのところで投錨した。カラバールまで8リーグ⁷⁴⁾の場所にいると確認できた」と、目的地を目前にしている。翌8日は「…風が弱く期待したほどには進む

69) 航海日誌には「…1人当たり18ポンドで折り合いがついた」と書かれている (Donnan [1965] p. 206.)。

70) また、1週間前の6月15日には、砂糖を購入している (Donnan [1965] pp. 205-206.)。

71) 12月16日の航海日誌には「…24人の水夫と1人の少年を乗せて出港した」と書かれている (T70/1213 p. 3.)。

72) ヒングストンはこの船がヴァージニア (Virginia) に行くのではないかと想像をつけている。

73) 1ファゾム (fathom) = 約1.8m

74) 1リーグ (league : 約4.8km) = 3マイル。

ことはできず…ニュー・カラバール川まで3マイルの所にいると推測される」と記されているが、翌9日には「…ロングボートを出したが〔水深に関して〕満足のいく結果ではなかった…」とあり、風量や水深が影響して、先に進めない様子が伝わってくる。

しかし、2月10日になってようやく十分な水深の針路を確保し、11日にはニュー・カラバール一帯を治める部族の長と話し合いの場を持っている。この交渉により「…黒人男性一人につき36本の棒銅、黒人女性一人につき棒銅30本、マニラ1つでヤム芋8つ…」の交換レートが設定された⁷⁵⁾。「…長時間にわたる会談の後…」という航海日誌の一文から、この会談の重要性がうかがえ興味深い。その後、2月12日には「何艘かのバンディー族(Bandy)のカヌーが黒人を乗せてやってきた…」同15日には「3艘のカヌーがやってきて…」と、2月12日以後取引は奴隷の売り手が船でアーサー号にやってくる形で進んでいく。

航海日誌には、奴隷だけではなく象牙を購入したことについても書かれている。例えば、2月14日の航海日誌は「…エルミナ所属の象牙商のオランダ人と会った…」と始まり、オランダ人商人から象牙を買いすぎたことを反省する内容となっている⁷⁶⁾。また、同17日には「我々の船にやってきたカヌーが何本かの象牙を持ってきたが、購入するに値しない代物だった…」と書かれており、現地住民が奴隷や食料だけでなく、他にも象牙も取引の対象としていたことがわかる。

また、RACの船は、常に原住民と友好的な関係を構築していたわけでもないようだ。2月19日の「…バンディー族と戦闘のおそれがあったので〔船員に〕武器と銃弾を持たせた…」という内容がそれを示している。しかし、現実には取引の中で争いに発展した形跡はアーサー号の日誌からは読み取れない。

アーサー号は2月12日から、3月19日に「この日、フォーゴ・タウン(Fogo Town)に再びやってきた」と、西インドに向けての航海の準備をはじめの前日まで、ほぼ毎日奴隷を購入している。奴隷買い付け最終日の3月18日時点で、アーサー号に乗船している奴隷の数は、男性が186人、女性が138人、そして少年9人に少女10人の計343人となる⁷⁷⁾。

しかし、すぐに川を下り、西インド諸島に向けて大西洋を横断できたわけではなかった。川を上るときとは違い、3月18日時点で約350人も乗員が増えているのである。そのため、座礁を避けるために、3月20日以降、アーサー号は頻繁に水深を測定している。例えば、3月23日の航海日誌には水深が2ファゾムの場所を航行している⁷⁸⁾。24日から26日にかけては、水深4ファゾム近くを確保して進んでいるが、27日にはその水深が2.5ファゾムとなり喫水が上昇している。しかし、「…2リーグ近く進んだところで水深が3ファゾムになり…」⁷⁹⁾と、27日には水深をある程度確保して進むようになり、この日

75) 「…長時間にわたる会談の後…」という航海日誌の一文から、この会談の重要性がうかがえ、興味深い(T70/1213 p. 7.)。また、マニラとは金属製の装飾具のことである。

76) 実際、2月17日の航海日誌には、そのオランダ商人が、アーサー号の購入した象牙の量が多かったことを気にしていたと、原住民から伝え聞いたことが書かれている(T70/1213 p. 18.)。

77) 「男性」と「少年」、「女性」と「少女」を区別する具体的な根拠は不明である。しかし、3月6日付けで「…40才を上回らず、12才を下回らないという会社の命令…」という言及があり、奴隷購入における年齢の要件を認めることができる(T70/1213 p. 11.)。

78) 奴隷購入前の2月7日には、アーサー号の水深として「12ファゾム」「5.5ファゾム」と言う数値が航海日誌に記載されている。

が水深測定を行った最後の日となった。窮地を脱したアーサー号では、3月28日に奴隷の人数確認が行われている。ヒングストンは「… [奴隷たちに] 一人ずつ甲板に上がってくるように…」指示し、その際に一人につきタバコを一本渡すという方法で人数を数えた。この結果、生存者数は、男性175人、女性135人、少年9人、少女10人、と確認された。

この後、アーサー号は3月30日の航海日誌に「…プリンシペが南西に見えた…」とあるようにカラバルから南下し、西インド諸島に渡るために、ケープ・ロペス (Cape Lopez) に一旦立ち寄る。これには2つの目的があった。1つ目は大西洋を横断するのに必要な水や食糧などの補給である。アーサー号は奴隷買い付けと合わせてヤム芋も購入していたが、4月13日の航海日誌には「…ヤム芋は我々が考えていたよりも多くの量が腐っており、船内には食べられるヤム芋が3万個もない」と書かれている。そのため、14日には、プランテンや水牛の乾燥肉をケープ・ロペスの現地住人から仕入れている⁸⁰⁾。そして2つ目が奴隷の静養である。カラバルを出てから、アーサー号船内では衛生環境が悪化し、奴隷の死者が後を絶たなかった。カラバル川を下りはじめた3月18日からケープ・ロペスに到着する前日の4月9日の約20日間の奴隷死亡者は男性22人、女性15人、少年1人の計38人にのぼっていた。その上、危機的なことに、3月31日には船医さえもが死亡した。「…非常に大きな痛手である…」という表現からも、深刻な様子が伝わってくる⁸¹⁾。また、追い打ちをかけるように、4月4日には医師の助手も死亡しており、船内の環境改善は大きな課題であった。そこで、アーサー号はケープ・ロペスで奴隷たちに休養を与え、また船内を清掃することで状況の好転をはかったのである。同地に到着した後の4月15日の航海日誌には「…黒人達もこの僅かな停泊の間に大いに元気を取り戻している…」と言及されている⁸²⁾。この一連の取り組みにより、ロペス岬到着後の4月10日から西インド到着後航海日誌に死亡者の記述がある5月24日の約45日間の奴隷死亡者は男性20人、女性14人、少年1人の計35人となり、死亡率は約半分にまで減少した。

4.2 アフリカ～西インド諸島

約10日の休息の後、アーサー号は4月16日に西インド諸島に向けて出帆した。大西洋横断ではこれまで航海日誌に出てくることのなかった器具、ログ(測定器)⁸³⁾が使用されている⁸⁴⁾。また、4月22日には再度、奴隷の数を確定させている。その結果は男性155人、女性119人、少年9人、少女9人の計292人であった⁸⁵⁾。5月15日にも、男性144人、女性110人、少年9人、少女9人の計272人が生存者とし

79) この後に続く「…より水深のある水路に進むことができたことは大いなる喜びであり、神のご加護の賜である…」という記述が印象深い (T70/1213 p. 14.)。

80) T70/1213 p. 17. なお、プランテンとはバナナに似たバショウ科の植物である。

81) 4月21日にも「…船医がいないので我々ができることといえば、彼ら(病人)にプランデーを与えたり、マラグエツタを煎じたりすることぐらいである…」とあり、船医と助手の死亡の痛手は大きいことがわかる (T70/1213 p. 17.)。

82) また、4月12日の航海日誌では「…我々の黒人も元気を取り戻したようである。我々はその理由が水を古いものから新しいものに変えたからであるという結論に至った…」との分析がなされ、病気による死亡が相次いだ原因が水にあったことが示唆されている。

83) 結び目のついた紐の片方に木片をくくりつけたものである。これを航行中の船の船尾から海中に落とし、船の速度・進んだ距離を測定する (東京商船大学船舶用語辞典編集委員会 [1988] 336頁。)

84) これまでのアフリカ大陸沿岸という陸地の目印がある場合とは異なり、大西洋上には目印となりうるものがないためだと考えられる。

85) 数え方の手順は前回と全く同じである。

て確認された⁸⁶⁾。3月28日、4月16日、5月15日と約1ヶ月毎に人数確認が行われていることが分かる。アーサー号がアフリカを出発してから約1ヶ月後の5月14日には、黒人向けの食料が残り少なくなったことが明らかとなった。同16日には「…黒人達の食料が尽きた場合に、我々の食料を彼らに与えるというわけにはいかない…」と懸念しているが⁸⁷⁾、アーサー号はヒングストンが残った食料の量から逆算した日程よりも早い5月21日にはバルバドスを視認し、5月22日の正午近くにカーライル湾で投錨している。

その日のうちにバルバドス到着の旨が現地代理人に報告され、翌23日にヒングストンは食料庫の確認を行っている。「約240個のヤム芋、ケープ・ロペスで仕入れた乾燥プランテン、干し魚18枚、豆の樽3つ、マラグエッタ少々、タバコ10ポンドを確認した…3日と持たないだろう…」と危機感を抱き、RAC社員による査察と確認を要求している。24日にはヒングストン自身が上陸し、奴隷に関する帳簿⁸⁸⁾をバルバドスのRAC代理人に渡している。25日にはRACの代理人がアーサー号に乗船し、ヒングストンの案内によって、食糧庫やヒングストンが覚え書きとしてつけた帳簿、象牙の購入に関する帳簿、残った船荷を確認した⁸⁹⁾。26日の航海日誌には「…28日に黒人の競りが行われる…」と書かれており、競りの行われた28日には「…我々の連れてきた黒人が多く売れた…」と記述されている⁹⁰⁾。しかし、完売したわけではなく30日、31日に連続して書かれている日誌の中では「…31日の天候は雨であり船にやってきた買い付け人は非常に少なかった。もし晴れていたならば黒人は全て売っていただろう。船内には23人の売れ残った黒人がおり…[RACの]従業員がやってきて彼らを船外に連れ出した。彼らも売り手がついたのだろう…」と競りへの所見を述べている。この後ヒングストンはアーサー号を降り、6月7日にナザニエル・グリーン (Nathaniell Green) 船長のエドワード・アン (Edward & Ann) 号でイギリスへと帰国する予定として締めくくっている⁹¹⁾。

5. おわりに 一結びにかえて一

本稿では、RACの貿易活動の様相を二つの航海日誌の分析を通じて明らかとした。RACの航海にかかわる活動や貿易の実態の特徴は以下に要約できる。

第一は、アフリカ沿岸にて形成されていた密な情報網の存在である。T70/1211では、ブレイク船長が1675年10月22日には現地部族の長に、そして11月16日にはウィネバの商館の責任者に、それぞれ不法業者のハウ船長の行方について尋ねている。また、同年10月17日には海上でハウ船長の探索を行ったという記述がある。T70/1213においても、象牙の取引に関して興味深い情報のやりとりが行われて

86) 数え方はこれまでとは若干異なり、病気の黒人をあらかじめ数えた上で、健康な黒人を従来の方法で数え上げた。ただし、タバコに関しては今回に限って言及がない。

87) 「…彼ら [奴隷] の食事の量を減らすこと…」が解決策としてあげられている。

88) 特許状、購入した黒人の数、死亡した黒人の数、黒人の数、バルバドスに生きて到着した黒人の数、である。

89) 残った船荷は、未開封の棒銅の箱8つ、開封済みの箱に入った棒銅24本、棒鉄26本、ナイフ16ダース、織物などである (T70/1213 p. 22.)。

90) 28日の日誌は「5月29日は水曜日である」と強調して結ばれている。ドナンによれば、5月29日はチャールズ2世の誕生日 (1630年5月29日) であり、復位の日 (1660年5月29日) ということである (Donnan [1965] p. 233.)。

91) 航海日誌の最後はジョージ・ヒングストンの署名で結ばれている。

いることをすでにみた。アーサー号も1678年2月14日にオランダ人の象牙商から象牙を大量に購入しているが、その後の象牙商の言動がアフリカの原住民を経由して2月17日にはアーサー号に伝わっている。このように、イギリス人の間だけではなく、象牙商や原住民、アーサー号という所属の違う人々の間でも、情報が共有されていたことは明らかである。

加えて、ブレイク船長は総支配人メリッシュからの命令書を、メリッシュの駐在するケープコーストにて受け取っているが、それだけではなく他の船の船長から、ケープコースト以外の場所でも受け取っている。例えば、1675年9月12日に、ブレイクはメリッシュからの命令書をエイルモア船長から、アキムにて受け取っている⁹²⁾。このように、船舶に関する情報がケープコーストに集約され、その上で支配人により行き先を指示する命令が発されていたと考えると、情報網はRACのアフリカ経営を支えていた重要な要素であると考えられることができる。

第二は、船の活動内容の相違からうかがえる、船舶の属性の違いである。ジェームズ号とアーサー号はイギリスを出港した後、アフリカを経由してバルバドスへ向かったという全体の航程は変わらない。しかし、アフリカ沿岸での活動内容は大きく異なる。ジェームズ号はケープコーストに向かい、その後各拠点地とケープコーストの間を行き来し、奴隷と物資の運搬や回収を行っている。一方、アーサー号はRACの拠点であるケープコーストには一度も立ち寄らず、ニュー・カラバルに直行し奴隷を買い付けている。そして買い付け終了後も、ケープコーストに向かうことなくバルバドスへ出発している。

また、大西洋を横断しバルバドスに到着してからの航程も同様に異なる。ジェームズ号はバルバドスに到着後、ネーヴィスへと向かい、実現はしなかったがジャマイカ行きを命じられている。しかし、ヒングストンは新たな指令を受けることもなくアーサー号を下船し、別の船で帰国の途についている。加えて、航海日誌の書き手も両船では相違がみられる。ジェームズ号の航海日誌の書き手は船長のピーター・ブレイクであった。しかし、アーサー号の航海日誌は船長のロバート・ドゥーグッドではなく、同船していたRAC社員のジョージ・ヒングストンによって記されているのである。

以上のような両船の活動内容の違いは、RAC社員の乗船の有無によっていると推測される。ジェームズ号は、アフリカ沿岸での活動においてはケープコーストに何度も立ち寄っている。しかし、アーサー号はケープコーストには一度も停泊していない。ここでデーヴィスやギャレンソンがあげたRACの衰退要因を考えれば、ジェームズ号が定期的にケープコーストでRAC社員と接し、アフリカ総支配人メリッシュの命令書に基づいて行動するのであれば、ジェームズ号が不正を働く余地を大きく抑えることが可能となる。とはいえ、アーサー号の場合はケープコーストにも立ち寄らず、またメリッシュからの命令書も受け取っていない。しかし、RAC社員であるヒングストンが同社の目付役としてアーサー号に乗船していたと考えれば、同船の航程も常にRACの監視下に置かれていたことになる。したがって、史料上の制約は大きいですが、二つの航海日誌はRAC社員の乗船と航路の間には強い関連性があることを示唆している。

だが、残された課題も多い。例えば、アーサー号が出国前に2度も船荷検査を受けているが、一方

92) Donnan [1965] p. 200.

でジェームズ号の臨検はフリゲート艦ホークによる1度だけである。もちろん、ドナンの航海日誌ではジェームズ号の出国に関する記述が削られているため、全ての船が出国前の検査を受けていたかどうか、現時点での断定は困難である。また、船上の活動についてはその概要を示すことはできたが、拠点地を含めたアフリカ沿岸の活動の実態や、西インド諸島における現地エージェントの活動についてはそれを十分に説明できたとはいえない。本稿におけるRACに関する考察は、冒頭で示したRACに関する問題提起のうち的一方であるわが国における研究の補完としての範囲にとどまるものであった。これは、本稿での論考の対象をRACに限定したことと、経済活動の実態を直接に反映しているとはいえ、RACの全体像を把握しづらい航海日誌に依拠したためである。今後、航海日誌を含め、書簡や会計書類など他の史料との対照させることでRACの考察を深め、より明確な全体像を示すことが、残された課題であることを指摘して、結びとしたい。

地図1 イギリス



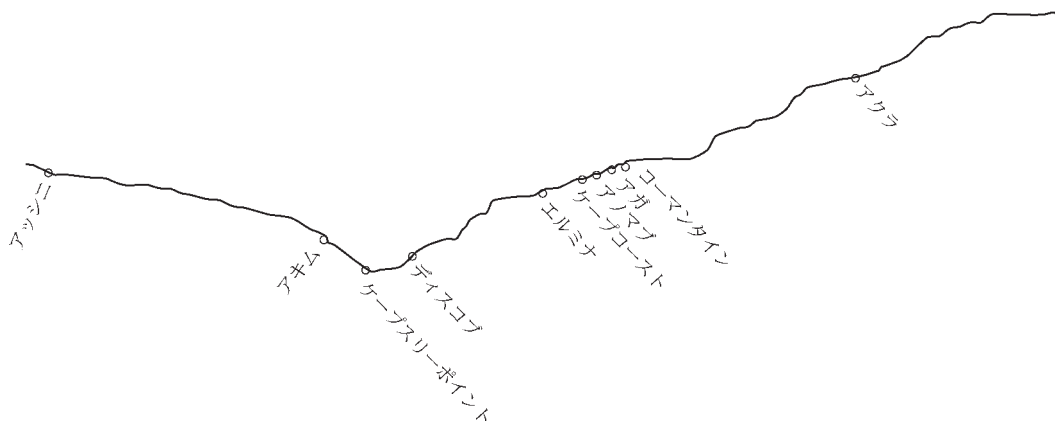
注：筆者作成

地図2 アフリカ西岸



注：筆者作成

地図3 黄金海岸



注：Donnan [1965], Davies [1957] を元に筆者作成。

地図4 バルバドス島



注：筆者作成

<参 考 文 献>

(1) 欧語文献

- Benjamin, T. [2009] *The Atlantic world: Europeans, Africans, Indians and their shared history, 1400-1900*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Carlos, A. M. [1994] Bonding and the agency problems: evidence from the Royal African Company, 1672-1691, in *Explorations in Economic History*, Vol. 31, No. 3, pp. 313-335.
- Carlos, A. M. and Kruse, J. B. [1996] The decline of the Royal African Company: fringe firms and the role of the charter, in *The Economic History Review*, Vol. 49, No. 2, pp. 291-313.
- Davies, K. G. [1957] *The Royal African Company*, London, Longmans.
- Donnan, E. [1965] *Documents illustrative of the history of the slave trade to America, Volume I: 1441-1700*, New York, Octagon Books.
- Falola, T., and Roberts, K. D. [2008] (eds.) *The Atlantic world 1450-2000*, Bloomington at Indianapolis, Indiana University Press.
- Galenson, D. W. [1986] *Traders, planters, and slaves: market behavior in early English America*, Cambridge/New York, Cambridge University Press.
- Jenkinson, H. [1912] The records of the English African Companies, in *Transactions of the Royal Historical Society*, 3rd Ser., Vol. 6, pp. 185-220.
- Nunn, N. [2008] The long-term effects of Africa's slave trades, in *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 123, No. 1, pp. 139-176.

- Porter, R. [1968] English chief factors on the Gold Coast, 1632-1753, in *African Historical Studies*, Vol. 1, No. 2, pp. 199-209.
- Ward, W. E. F. [1948] *A history of the Gold Coast*, London, George Allen & Unwin.
- Zook, G. F. [1919] The Company of Royal Adventurers of England Trading into Africa, 1660-1672, in *The Journal of Negro History*, Vol. 4, No. 2, pp. 134-231.

(2) 邦語文献

- 秋田茂 [2004] (編著)『パクスブリタニカとイギリス帝国』(イギリス帝国と20世紀 第1巻) ミネルヴァ書房。
- 池本幸三 [1968] 「王立アフリカ会社と奴隷貿易(1)」『経済学論集』(龍谷大学) 第8巻第2号, 81-101頁。
- 池本幸三 [1969] 「王立アフリカ会社と奴隷貿易(2)」『経済学論集』(龍谷大学) 第8巻第3号, 186-209頁。
- 大塚久雄 [1969] 『株式会社発生史論』(大塚久雄著作集 第1巻) 岩波書店。
- 熊谷次郎 [2004] 「自由貿易帝国主義とイギリス産業」秋田茂 [2004], 21-49頁。
- 近藤仁之 [1965] 「英領西印度諸島における砂糖革命の経済的意義」『社会経済史学』第30巻第5号, 381-407頁。
- 高橋裕悠 [2009] 「17-18世紀イギリスのアフリカ貿易に関する学説史的検討 —イギリス王立アフリカ会社を中心として—」『経済論究』(九州大学) 第135号, 69-84頁。
- 東京商船大学船舶用語辞典編集委員会 [1988] (編)『和英・英和船舶用語辞典』成山堂書店。
- ベイリン, B. [2007] (和田光弘/森丈夫訳)『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会。
- 山田勝 [1976a] 「英国王立アフリカ会社の経営破綻」『駒沢大学経営学部研究紀要』(駒澤大学) 第6号, 69-86頁。
- 山田勝 [1976b] 「イギリス王立アフリカ会社の設立と経営」『駒大経営研究』(駒澤大学) 第7号, 69-93頁。